

「夜の都市計画」への問い

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻准教授 中島 直人

「ナイトタイムエコノミー」、「ナイトライフ」、「ナイトカルチャー」、「ナイトメイヤー」。観光振興や地域活性化の観点から、都市の夜が注目されている。「夜の都市計画」は、そうした都市の夜に積極的にコミットしていくという意志を持った都市計画を指すのだろう。この「夜の都市計画」という言葉自体は、実は今から90年ほど前、都市計画家・石川栄耀が生み出したものである。「夜の都市計画」論は、愛知都市計画地方委員会技師として名古屋を中心に活躍していた石川の都市計画思想の中核をなすものであり、1925年から1926年にかけて、「郷土都市の話になる迄 断章の二、夜の都市計画」というタイトルで『都市創作』誌上（1巻3号、1巻4号、2巻1号）において初めて本格的に提示された。この石川の「夜の都市計画」論の内容を紹介していこう。

石川栄耀の「夜の都市計画」論

石川が「夜の都市計画」論を発想することになる契機は、1923年から1924年にかけての1年間におよぶ海外出張中に果たした、イギリス都市計画の父、レイモンド・アンヴィンとの面会にあった。石川がアンヴィンに教えを乞うために提示した名古屋の用途地域指定図に対して、アンヴィンは「あなた方の計画は人生を欠いて居る」と指摘し、都市計画においては、人々の文化的な生活のための計画を産業計画の上位に置かねばならないと諭した。名古屋の用途地域指定図では、海岸や河川・運河沿いは全て工業地域の青色で塗られていた。アンヴィンは石川に、幾つかの欧州の都市

を事例に水辺の公園がいかに「愉快な生きがいのあるあそび場」となっているかを示し、「無邪気な明るいあそびこそ人生の大きな部分」であると説いたのである。

石川はこの時の会話を発展的に解釈して、「夜の都市計画」論を組み立てた。大事な点は、夜は決して「余暇」ではないということである。本当の人生計画から言えば、あくせく働く産業のための時間である昼間が「余暇」なのであって、労働から解放された夜こそが「正味」なのではないかと、アンヴィンにならって、昼と夜、産業と生活の関係を逆転させてみたのである。都市を成立させるためには産業が必要であるが、しかしそれは手段であり、礎に過ぎない。都市の本態、そして都市の本当の目的は、愉快な文化生活の方にあるのだと。

夜に着目した石川の「夜の都市計画」論は、当時の電力供給網の急速な普及を背景として、夜の個性を活かした都市美を生み出すための「街路照明」・「建築物照明」、音楽ホールや劇場などの固定的な「静的設備」と散歩道などの漫然とした楽しみを提供する「動的設備」からなる地区スケールの「夜の休養娯楽計画」（図1）、娯楽と並び立つ智識の楽しみを提供する夜間学校を想定した「通俗教化計画」、そして「隣交館」と「小公園」を中心とした、人と人との間に失われつつある愛を回復させるための「夜の親和計画」で構成された。「夜の都市計画」論は、都市計画家・石川のマニフェストとなった。石川は、照明学会に参加し、照明技術、計画を研究すると同時に、「夜の休養娯楽計画」の舞台としての盛り場商店街の研究と実践を開始したのである。

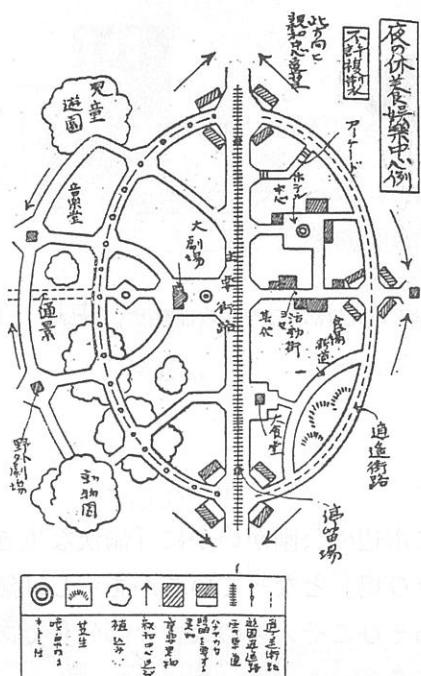


図1 石川栄耀の「夜の休養娯楽計画」
(出典: 石川栄耀『郷土都市の話になる迄(4)』『都市創作』、
2卷1号、1926年、21ページ)

実践としての商業都市美運動

石川は1927年7月に「『名古屋をもし気のきいたものにする』の会」を立ち上げ、さらに翌1928年には名古屋都市美研究会を設立した。とともに名古屋の商工会議所に集う看板デザインの専門家や照明技師たちがメンバーとなり、盛り場商店街の育成を目指した。その活動の成果として特筆すべきは、名古屋の大須と広小路における、両商店街の商店主たちとの研究会の立ち上げ、美化案の提案、そして、市民意識の醸成のためのお祭りの創設などの活動である。広小路祭では、20台の花車、浴衣姿の400名が大行進するカーニバルの他、広小路の歴史や所縁の人物を紹介する展示や広小路の将来を考える肩の凝らない漫談会なども開催した。盆踊り競技を中心とした大須祭りには、毎年10～20万人の人手があったという。

石川は1933年に東京地方都市計画委員会に転任した後は、こうした名古屋での経験をさらに広く、全国で展開すべく、照明学会での活動を活発化させるとともに、1936年に商業都市美協会を設立した。商業都市美協会の幹事を務めたのは、石川の実兄、根っからの趣味人であった根岸栄隆である。根岸は、商業都市美協会の機関誌『商業都市

美』の創刊号で、「吾らの都市を、商業という現代的意識の下に、明るく朗らかに、そして美しく仕立て上げ、快適な表現の中に、勝れた感覚と、豊かな情操とを盛り上げ、そこに都市生活者大衆の親しみを、深めようとする新しい運動」と述べている。石川もまた、彼自身の都市美運動を、統一感ある綺麗な街並み、フォーマルな都市美を求める「大礼服」の運動とは異なる、「ユカタ」「開襟シャツ」の運動として位置づけた。石川の「夜の都市計画」論に基づく盛り場商店街での都市美運動は、都市生活者一人ひとりの感覚に根差した、愉快で親しみのある都市を目指した。なお、石川の商業都市美運動は戦後の東京の戦災復興計画における歌舞伎町、麻布十番、王子新天地、江東楽天地などの「創設盛り場」の建設へと繋がっていく。

「夜の都市計画」の論点

以上のような石川の「夜の都市計画」論、そして実践としての商業都市美運動の軌跡からは、「夜の都市計画」を展望する際の様々な視座、論点を導き出せるだろう。ここでは、以下の3つの論点を提示しておきたい。

①寛容で包容力のある「夜の都市計画」とは？

石川の「夜の都市計画」論では、夜学校や民衆図書館なども重要な位置づけを与えられていた。石川は「智識も又楽しい」として、十分な教育を受けることのできなかった労働者たち向けの「親しい快よい夜学校」を構想した。石川は、夜学校は昼の学校とは違うつくりであるべきだとし、「快よい照明と、柔らかい色と、静な声の通る様にして、椅子、机ももう少しカラダに工合の好い様にする。(勿論そうしたら寝てしまうかも知れないが、寝る程疲れて居るのならそれも仕方がなかろう。むしろ教室と講義の無味が寝かすのではないか)。」とイメージを綴った。啓蒙的な立場からの一方的な昼耕夜誦の提案かも知れない。しかし、そこには都市をともに生きる人々への愛がある。「夜の都市計画」は、誰にでも開かれている。それこそ夜が「余暇」ではなく、夜にこそ人生を生きざるを得ない人たちも多数いる。現代における格差、貧

困、マイノリティ、孤独などに関する課題、つまり昼の社会の矛盾やひずみの先にある現実に「夜の都市計画」は届くだろうか。また、石川栄耀が敬愛した盛岡中学の先輩、歌人・石川啄木は「浅草の夜のにぎはひに まぎれ入り まぎれ出て来しさびしき心」(『一握の砂』収録)と詠った。その「さびしき心」の持ち主に「夜の都市計画」は何が提供できるのだろうか。石川の名言「社会に対する愛情、それを都市計画と云う」の意味するところは、寛容で包容力を持つ「夜の都市計画」を通じて端的に理解されることになるはずだ。

②日本、アジアならではの「夜の都市計画」とは？

石川の「夜の都市計画」論の発想の契機は欧米出張でのアンワインとの面会や、実際に訪ね歩いた欧米都市体験であったが、その後の展開においては、名古屋や東京の盛り場商店街での実践とともに、何度か訪れる機会のあった東アジア諸都市での体験が重要であった。石川は盛り場商店街研究のまとめた成果として、1938年から1939年にかけて『都市公論』(22巻11号～12号、23巻1号)に「盛り場風土記」を発表した。各地の盛り場商店街の個性を「風土記」という形式を借りて描き出そうとしたその執筆のきっかけは、1936年春の朝鮮・満州出張、そして1938年5月から8月にかけての上海滞在時の盛り場体験であった。石川は満州人たちの生活構築の意思を反映した盛り場のありようにいたく感動した。上海では、滞在期間中、毎晩、一人で現地の中国人たちの盛り場に足を延ばし、ショウウィンドウを冷かしたり、中国語のローカルな劇、ローカルな音楽を楽しんだりして時を過ごした。とりわけ日本人客は他に一人もいない茶館に頻繁に足を運んだ。「ここに何となく『都市』があるような気がして、よく出かけた」と、石川は『照明学会雑誌』(23巻3～5号、1939年)に寄せた「上海報告」にてその理由を説明している。夜の楽しみ方は多様である一方、日本、そしてアジアの気候、風土、習慣に根差した「夜の都市計画」というものはあるだろう。私たちに本当の「くつろぎ」、「にぎわい」、

「したしみ」、「よろこび」をもたらす夜の都市とはどのようなものだろうか。まずは、それぞれの地域、都市、国で、豊かな夜の文化を掘り起こした上で、そこから創造的に夜を構想したい。

③都市計画そのものの変革を導く「夜の都市計画」とは？

石川の上海滞在の任務は、日本軍からの要請で、その占領地での都市計画を立案することであった。そこで石川は「自分はこの度官命により四ヶ月余上海に滞在する機会を得た。その間自分は本務の余暇に盛り場と照明に関する資料を集めて見た。そしてまいには、結局『盛り場と照明』こそは大上海計画の要点ではないか」(前出「上海報告」)と思うに至った。石川は「大上海都市計画勧興地区計画」を立案した。石川にとって、こうした「夜の都市計画」は夜に限定した都市計画ではなかった。石川は「盛り場風土記」の出だしで、「都市計画と云う華々しい名前を有しながら自分達の仕事がどうも此の現実の「都市」とドコかで縁が切れてる様な気がしてならない」と問題意識を綴った。石川は都市生活者の視点から、都市の本態に近づく都市計画のことを「夜の都市計画」と呼んでみたのである。アンワインは「life」と言った。石川は「人生」と訳した。ともに人間の生き方について、都市計画で語ろうとした。石川が問うたのは、いやアンワインが石川に説いたのは、都市計画そのものありようであった。現代において「夜の都市計画」が都市計画に対して提起している重要な議論は、都市経営、地域経営の観点から都市計画を見直そうということである。しかし、それだけではない。「夜の都市計画」は、そもそも私たちの都市計画は「人生」というものに正面から向き合っているのだろうかという相も変わらない根本的な問いを投げかけてくる。だからこそ、こちらも「夜の都市計画」が都市計画そのものをどう変革していくのかを問いたい。各地での実践を丁寧にレビューしてみることで、その答えに至る道筋を見出すことができるのではないだろうか。

(なかじま なおと)